

「百年記念塔」 滝川市のシンボルが解体

ストーリー 体の方針決定

北海道百年記念塔（札幌市厚別区）の解体問題が裁判沙汰になるなど注目を集めるなか、もうひとつの「百年記念塔」も今年、将来的な解体の方針が決まった。滝川市のシンボルとして市民に親しまれている滝川市開基百年記念塔だ。1998（平成10）年10月末の閉鎖からすでに約25年が経過しており、こちらは北海道百年記念塔とは違い、解体反対の声はほとんど上がっていない。竣工からわずか7年半で役目を終えた、滝川市開基百年記念塔の歴史を振り返ってみたい。（フリーライター・内海達志）

▲当時使用されていたパンフレット

閉鎖された白亜の塔

滝川駅の跨線橋から東側のホームを眺めると、遠くに白い塔体が見える。滝川市の開基100年を記念し、1991（平成3）年2月にオープンした、高さ59・6メートルの百年記念塔だ。

1970（昭和45）年に完成し、100メートルの高さを誇る「本家」と比べると、歴史もスケールも見劣るものの、滝川の風景に溶け込んでいた。

だ街のシンボルである。駅前からバスに乗り、現地を訪れてみた。閉鎖されて久しいが、「100年記念塔入口」という停留所名が残されている。

バス停から歩くこと数分、小高い丘の上に記念塔はそびえており、エントランスに立つと、暑寒別連山や十勝連山の雄大な眺望が視界に飛び込んできた。展望室の床面が、開基100

れないが、遊具などが設置されており、公園自体はいまも市民の憩いの場となっているようだ。

ちなみに、北電公園がある泉町は、2月号で紹介した人造石油工場があった場所で、北電公園から近い市民公園には「人石記念塔」が建てられている。人石元社員により、1957（昭和32）年に設

けられたものだ。

六角錐の白亜の塔は、そのシルエットが北電公園の百年記念塔に似てなくもない。滝川市の歴史を語るうえで欠かせない2つの塔が、これほど近接しているのは何かの縁だろうか。

この位置関係が、百年記念塔の存廃に多少なりとも影響を及ぼすことになったのだが、その詳細は後述する。

市役所新庁舎が打撃に

百年記念塔の管理を担っている滝川市産業

振興部観光課の山平千奈都さんに話を伺った。



▲滝川のシンボルである開基百年記念塔



▲北電公園のなかに建つ



▲最寄りのバス停

0年に因んで、標高100メートルになっている。展望室からのパノラマは素晴らしかっただろうと思う。

入口は板戸で塞がれており、内部を窺うことはできないが、劣化が進んでいるであろうことは容易に想像できる。風雪にさらされたせいか、入口部分の足場のコンクリートはポロポロになっていた。

記念塔が建つのは北電公園だ。北海道電力滝川発電所の残灰置き場を転用した公園で、塔が完成する前年、北電から市に用地が無償譲渡された。塔には入

記念塔が誕生する契機となった開基100年は、官民挙げて盛大に祝おうと、大変な盛り上がりを見せたという。「風がみつけた街・滝川」という記念ソングも作られた。作曲は

『長崎は今日も雨だった』『なみだの操』を手掛けた、音更町出身の彩木雅夫。歌はダカーポと、なかなか豪華だ。

「昔、全道で放送され



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)